

良き先輩であり 人に尊敬される人とは

松見裕二

ある朝、その日は突然やってきてしまった。電話を受けその一報を聞いたとき、福田さんの性格からまたどっきりネタかと耳を疑った。というよりも悪い冗談であってほしいという希望があったと思う。

福田さんとの出逢いは平成15年に旧芦辺町に採用になり、原の辻遺跡調査事務所にあいさつに行ったときに始まる。あの大らかな性格にして面倒見のよさから県と町という垣根を越えて良くしてもらった。現場では人に厳しく、それ以上に自分にもっと厳しくをモットーにしていた人だった。現場に出れば常に真剣な眼差しで調査を行い、成果を出す。事務所に戻れば遺物の実測を自らやっている姿が印象的である。かと思えば、常に人を笑わそうとギャグを連発する。うけないとうけるまで何度も繰り返し、ツッコみを待っている。人の話もくだらない話であればあるほど真剣に聞いて、真剣な話になればなるほどボケたがる。そんな性格だったからこそ福田さんを悪く云う人はいなかったのではないかと思っている。福田さんの言動を評価する単位があった。1（高田）純次から10（高田）純次の10段階の純次で評価を行うものであった。適当なことを連発するほど純次の数も上がっていく。いつしかそれがギャグのおもしろバロメーターになっていった。適当なことを言わせれば最期まで言い続けるし、時折、場が静まったら必ずギャグを入れてくる。常に会話の中心には福田さんがいたことが思い出される。5純次を超えるとそのギャグに自信を持ち、現場でもそのギャグを連発していた。それがうけようがうけまいが福田さんにとっては関係ないことだったんだろう。常に思いついたギャグを口にするだけで満足だったのかもしれない。

福田さんとのエピソードは、福田さんが壱岐で勤務していた時のことがほとんどである。まじめに仕事をした時ほど夜はPパークに行っていたような気がする。その日のPが勝ったか負けたかは翌日の顔をみればわかるよど表情に表れていた。勝って上機嫌な時に「晩飯食いに行きませんか？」と切り出すと「何食いたいんだ。肉か。食いに行くぞ」と壱岐牛を奢ってもらったことが数度ある。そういう日があるかと思えばPで負け続けて、給料日前になると「カップラーメンを買う金もないけん飯代貸してくれ。給料入ったら返すけん」なんてこともあった。たまに情報交換会という名の雀卓を囲む会があった。囲んでいる時は先輩や後輩、上司や部下の垣根を越えた熱いバトルが白熱した。なんでもないことで皆が笑い、笑顔で楽しみ、唐子丼を食べて満足する。時には日が昇るまでやった日もあった。終わるときには「もうやらんぞっ。俺を誘うな」というのが決め台詞だったが、次回の集合をかけるのは必ず福田さんだった。そのまま朝出勤すると眼の下にはクマをつくり疲労困憊の福田さんの姿がまた印象的であった。そんな福田さんの姿を見て、所長は「また昨日もやったんか 年齢を考えろ」って笑いながら注意していた。

仕事以外での話が充実していた福田さんとの思い出だったが、短い時間だったけれどもたくさん学べることがあった。「後輩を常に思いやり、育てようとする心」、「自分らが若気の至りで口にしたことを上司に代弁してくれていたこと」、「ミスをしては責めず、なぜミスをしたかについて徹底的に追及したこと」、そして何より「人に尊敬されること」においては天性のものを持っていた人なのかもしれない。まだまだ、追いつくことはできないが少しでも近づけるよう毎日仕事に向かい合っている。福田イズムのすべてを受け継ぐことはできないが、福田さんみたいな40代、50代になりたいと思う。そして後輩に頑固うどんを奢ってもらえるような大人にならないといけないと心に誓った。